

異形土器 切断蓋付土器

-出土状態と器形を考える-

成田滋彦

1 はじめに (図1)

今回記載する『切断蓋付土器』とは、従来、蓋付土器・会口土器と呼称されていた土器であり、『…土器製作時の際に生乾きの状態で土器を切断して体部と蓋部とに二分する土器…』(傍線筆者) (成出1986) と定義したものを切断蓋付土器と理解する。そのため、当該時期で出土する蓋のみの土製品については、土器自体を切断していないため、切断蓋付土器の範疇には入らない。

筆者は昭和61年までの資料を用い、東北地方の資料を中心に『切断蓋付考』として、弘前大学考古学研究第3号に執筆した。その際に、このような特異な土器の切断蓋付土器の性格及び用途に関しては、祭礼儀式用として当時は把握したが、更に増加した資料を用いて出土状態と器形から使用用途を考えていきたいと思う。

なお、記載にあたっては対象地域を北海道・青森県・秋田県・岩手県とし、対象時期を縄文時代中期・後期に限定して考察する。

2 切断蓋付土器の出土状況 (図2~4)

切断蓋付土器の出土状況を、遺構内と遺構外とに分けて記載する。

一住居跡 (図2・3)

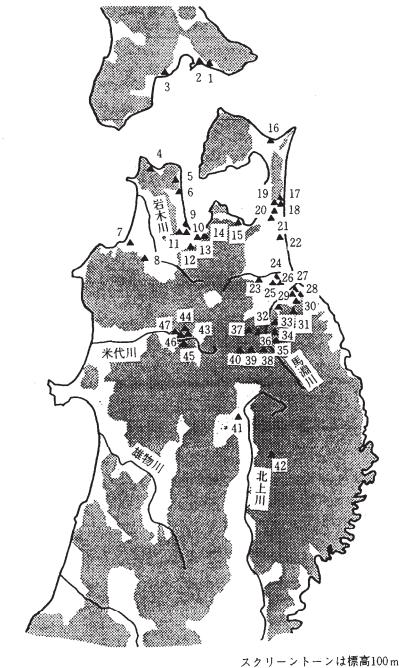
住居跡内から出土したのは、6遺跡(注1)で9軒の住居跡から出土している。

《住居跡の大きさ》

楕円形・円形の形態で、4m前後の住居跡の大きさが主体を占めている。三内遺跡(青森県1978)では、一部のみの検出であるが、6.6mを測り住居の拡張がみられ、大型住居跡の可能性が考えられる。また、張出部に埋甕が存在しているなど、他の検出住居跡と相異する。

なお、沖附(2)遺跡(青森県1986)では、住居跡の中央部に長径1.7m・短径1.2mの方形の落ち込みを有している点は、他の住居跡の床面構造と相異する面をもつている。

以上のように切断蓋付土器が出土した住居跡は、他の住居跡と形態・大きさを比較すると変化はみられない。この事は、岡本氏(岡本1983)が指摘しているように祭りの道具をゆうする住居跡は『…特



- 1 浜町A遺跡 2 戸井貝塚 3 矢不来2遺跡 4 中の平遺跡 5 今津遺跡 6 尻高(4)遺跡 7 大曲I遺跡 8 十面沢遺跡 10 三内遺跡 11 三内丸山(6)遺跡 12 小牧野遺跡 13 莢沢遺跡 14 月見野遺跡 15 浜懸遺跡 16 石持納屋遺跡 17 大石平遺跡 18 上尾鮫(2)遺跡 19 沖付(1)遺跡 20 沖付(2)遺跡 21 弥栄平(6)遺跡 22 小田内沼(1)遺跡 23 薬師前遺跡 24 中ノ沢西張遺跡 25 苗代沢遺跡 26 切谷内遺跡 27 莢窪遺跡 28 長者森遺跡 29 田面木平遺跡 30 牛ヶ沢(4)遺跡 31 外長根(4)遺跡 32 泉山遺跡 33 君成田IV遺跡 34 駒板遺跡 35 滝谷III遺跡 36 田中(3)遺跡 37 合名沢遺跡 38 青久保遺跡 39 馬立II遺跡 40 馬立I遺跡 41 卯遠坂遺跡 42 立石遺跡 43 飛鳥平遺跡 44 大湯環状列石 45 高屋館遺跡 46 北の森II遺跡 47 はりま館遺跡

定の役割をもった住居の存在を想定させるが、それでも住居は他のものと変わることろは少ないため、祭りの場と日常生活の場あるいは集団の場と家族の場というものが未分化の状態を示すものと考えられよう…』としたが、切断蓋付土器をゆうする住居跡も集落内に於ける住居の変化はみられない。しかし、三内遺跡では大形住居から出土しており、大形住居の存在も検証する必要があると思われる。

《切断蓋付土器の出土状況》

上尾駒(2)遺跡(青森県1988)では、B J 9号竪穴住居跡で炉内(注2)から出土し、C J 62号竪穴住居跡の床面から『…切断蓋付土器は、底部を上にした倒立状態で出土した…』このような倒立状態の置き方は、弥栄平(6)遺跡の第11号住居跡にもみられ『…床面南壁際から完形の第Ⅲ群2類土器(1)が1個体倒立した状態で出土した。口縁部をやや床面に埋め込んだ状態で設置したものである…』(青森県1991)とした状態であり、意識的に置かれた状態であることが考えられる。

なお、床面からの出土は上尾駒(2)遺跡B J 7号竪穴住居跡・馬立Ⅱ遺跡のB II a 10住居跡・B II b 9-2住居跡(岩手県1988)からも床面から出土しているが、出土位置は不明である。一方、住居跡の覆土からは三内遺跡のJ-14号竪穴住居跡・馬立Ⅰ遺跡のG II f-1住居跡(岩手県1988)から出土している。

なお、沖附(2)遺跡の第7号竪穴住居跡の出土は、第4層中で30cm離れて接合しており、別個に置いた可能性が考えられる。

《住居跡内の堆積土》

堆積土の状況を概観すると、上尾駒(2)遺跡のB J 7号竪穴住居跡では第5層中から焼土・B J 9号竪穴住居跡の第1・4層中から焼土粒が出土しており、馬立Ⅱ遺跡のB II a 10住居跡で、第3層中から焼土粒が出土している。

これらの事例から、住居跡内の焼土の出土は焼失家屋で生じた焼土の堆積状況ではなく、住居跡の廃棄後に凹地で火を焚いた痕跡と考えられ、何らかの火を焚く行為を行ったと考えられる。

このように覆土を利用しておこなう行為は、前記した火を用いるものと、弥栄平(6)遺跡の第11号住居跡のように火を用いないものがあるが、住居跡の凹地を利用した行為が存在したと考えられる。

《住居跡内の共伴遺物》

切断蓋付土器と他の遺物の共伴関係は、切断蓋付土器のみの出土の馬立Ⅱ遺跡、石器・石製品が共伴している弥栄平(6)遺跡・沖附(2)遺跡・上尾駒(2)遺跡のB J 7号竪穴住居跡があり共伴の遺物が少ないパターンの遺構と、馬立Ⅰ遺跡のように、ミニチュア土器・土製品等と多量の遺物が共伴しているパターンの遺構がみられる。

なお、三内遺跡のJ-14号竪穴住居跡からは、同一層位中から双口土器という異形土器と共におり、二個一対の関連が考えられる。

このように、前記した住居跡内の堆積状況からも考えてみると、切断蓋付土器の使用は、住居跡の床面でおこなわれた第一の行為が存在し、その後に住居跡廃棄後に切断蓋付土器を用いない第二の行為が存在した。その際は、遺物を多く用い火を使用した行為が行われたと考えられる。

－土坑－(図4)

《出土遺跡》

切断蓋付土器が土坑内から出土したのは、青森県では尻高(4)遺跡(青森県1985)・小田内沼(1)遺跡(三沢市1992)・小牧野遺跡(青森市1996)・今津遺跡(青森県1986)・沖附(2)遺跡(青森県1986)・大石平遺跡(青森県1987)・上尾駒(2)遺跡(青森県1988)・薬師前遺跡(倉石村1998)と、秋田県の飛鳥平遺

跡(秋田県1982)の9遺跡から土坑内で出土している。

なお、今津遺跡の第1号埋設土器及び上尾駒(2)遺跡のB-3埋設土器は、報告書中では埋設土器と報告されているが、図版等を再検討すると土坑内に直立して出土したと考えられるので、土坑の項目に分類して記載する。

《土坑の形態・大きさ・堆積土》

形態には、断面形がフラスコを呈するフラスコ状ピットと、平面形が橢円形・円形・不整形等のピットの形態がみられる。

土坑の底面は、フラスコ状ピットが150cmを越えるのに対して、フラスコ状ピットは100cm前後に集中している。

なお、小牧野遺跡の第128号土坑のフラスコ状ピットは、坑底面178cm・深さ193cmと検出したフラスコ状ピットの中で最大である。また、大石平遺跡のX-2区では検出した第209号フラスコ状ピットも坑底面が200cmを測り、X-2区の中では最大を測るものである。

この事は、切断蓋付土器が出土したフラスコ状ピットは、集落の中でも大型な土坑であることが指摘できる。

堆積土では、小牧野遺跡の第128号土坑の堆積土中に焼土を含んでいるが、前記の住居跡内の体積土で指摘したその場で火を焚いて生じた焼土かどうかは判断できない。

《切断蓋付土器の出土状態》

出土位置は、土坑内の底面と覆土に分かれる。底面は、大石平遺跡ではフラスコ状ピットの周縁部から多く出土し、今津遺跡・飛鳥平遺跡・上尾駒(2)遺跡B-3埋設は横位の状態で出土している。

なお、薬師前遺跡では直立と倒立がみられるものである。覆土からは、沖附(2)遺跡・小牧野遺跡第128号土坑が横位の状態で出土し、小田内沼(1)遺跡では『…土壙内から埋設された切断土器が直立して出土した。土壙内の底面に据え置かれず、覆土2層を寄せて据え置き、その後さらに覆土2層で埋めたものと思われる…』として人為的に堆積土を動かしているものである。

《共伴遺物》

切断蓋付土器と共に伴した遺物は、尻高(4)遺跡・小牧野遺跡の第128号土坑が石器と共に伴しており、大石平遺跡の第330号土坑では石器と土器片円盤が、沖附(2)遺跡では粗製の深鉢形土器が共伴している。なお、薬師前遺跡では3号棺から猪牙製垂飾品9点とベンケイ貝製腕輪4点が出土している。

《人骨の有無》

薬師前遺跡では、土器内から壮年期男性・壮年期女性・成人か小児の3個体分の人骨が出土している。

また、小田内沼(1)遺跡では土器内の土壤分析をおこなった所、埋葬した土坑墓の可能性が高いという結果を得ている。

一埋設土器一(図4)

埋設土器は、上尾駒(2)遺跡(青森県1988)のB-1埋設土器1基のみの検出であり、遺跡内に位置する住居跡群とは、離れた地点から検出している。

出土状態は、やや傾いているが直立状態で出土しており、埋設土器の掘り方は円形を呈する。

土器は完形で器外面に赤色顔料を塗布している。

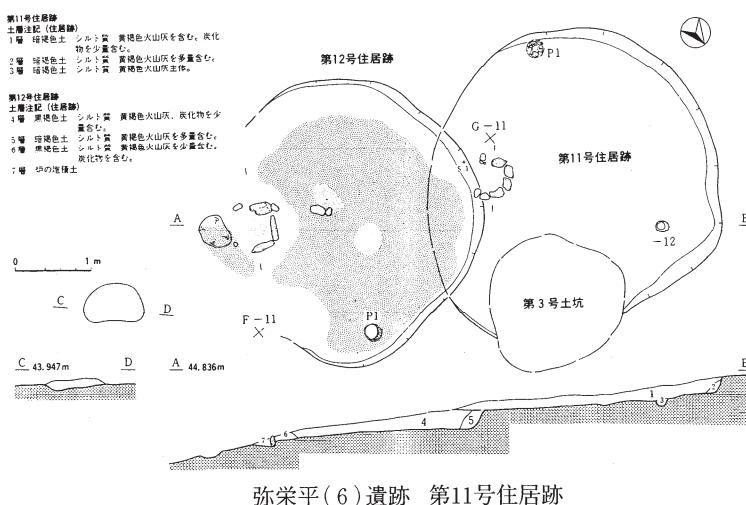
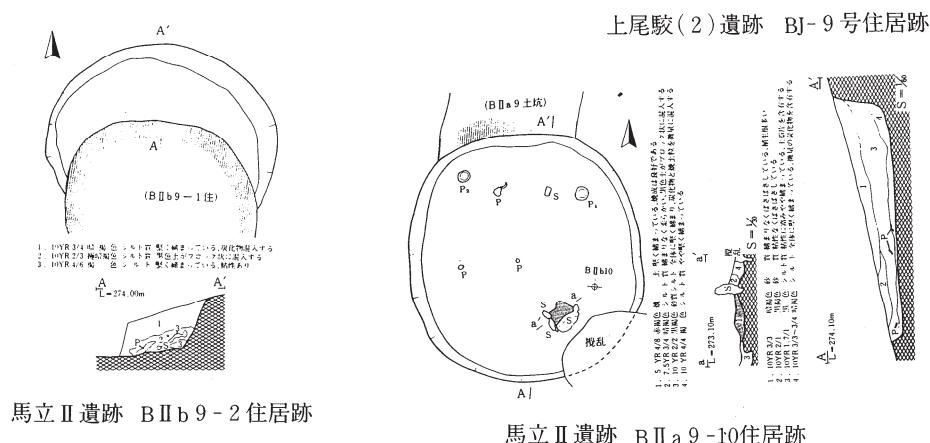
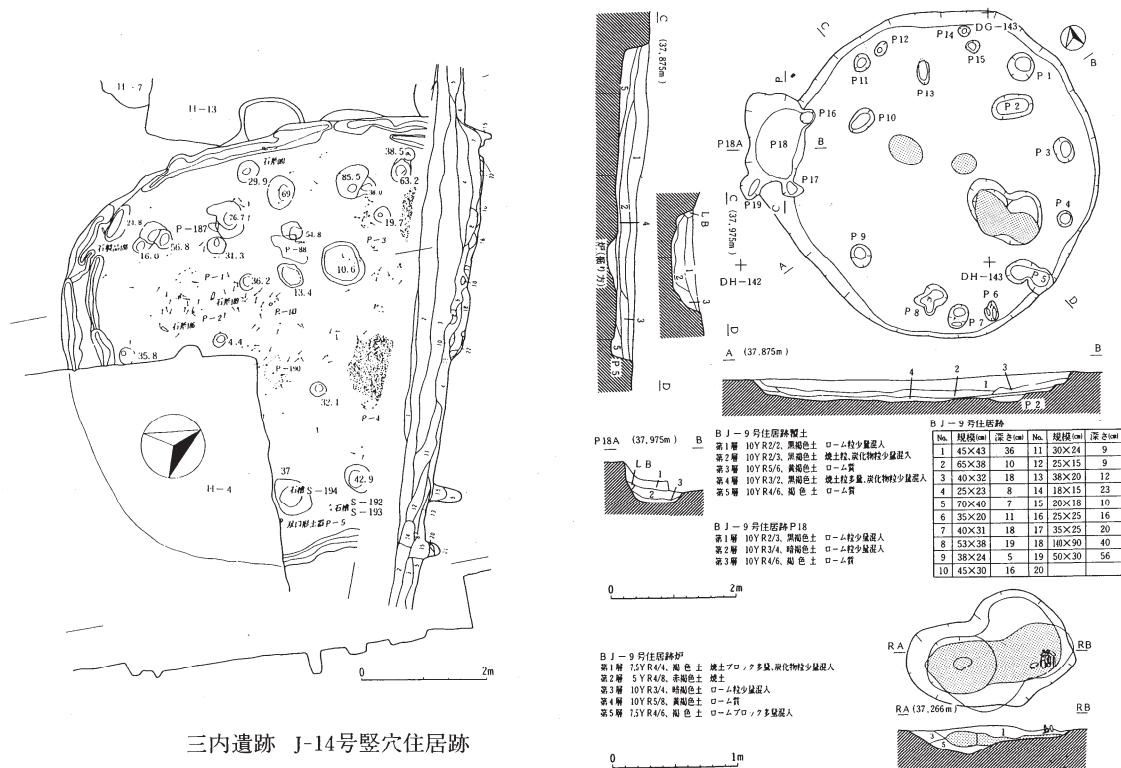
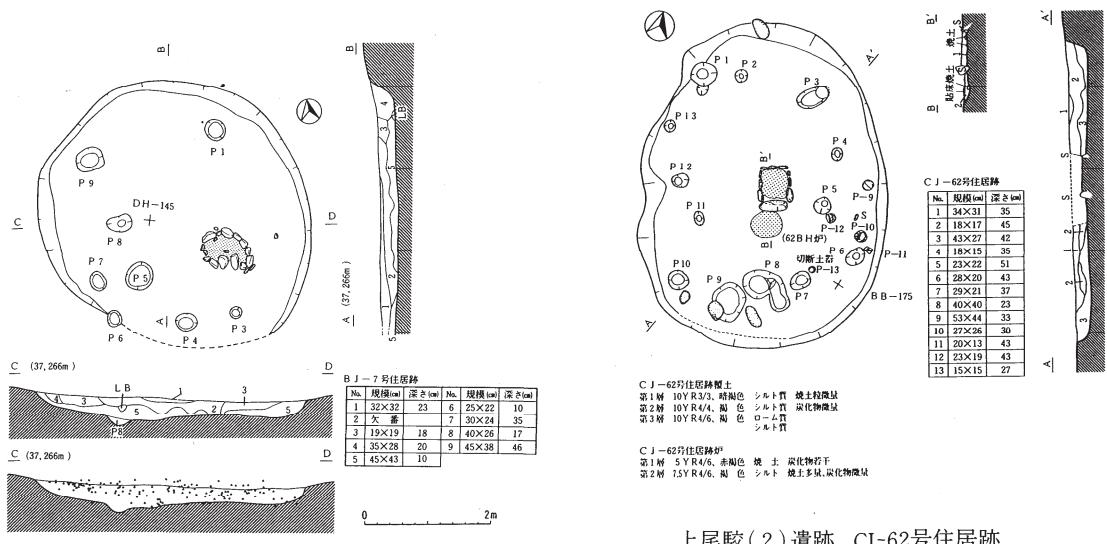
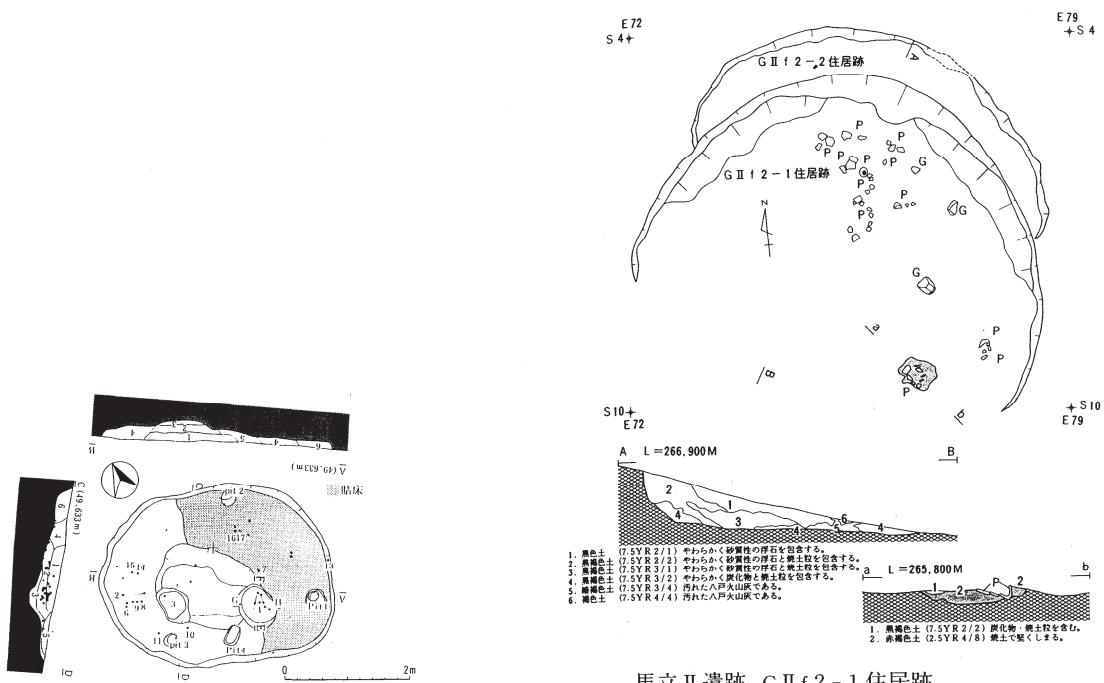


図2 住居跡 (1)



上尾駒(2)遺跡 BJ-7号住居跡



沖附(2)遺跡 第7号竪穴住居跡

図3 住居跡(2)

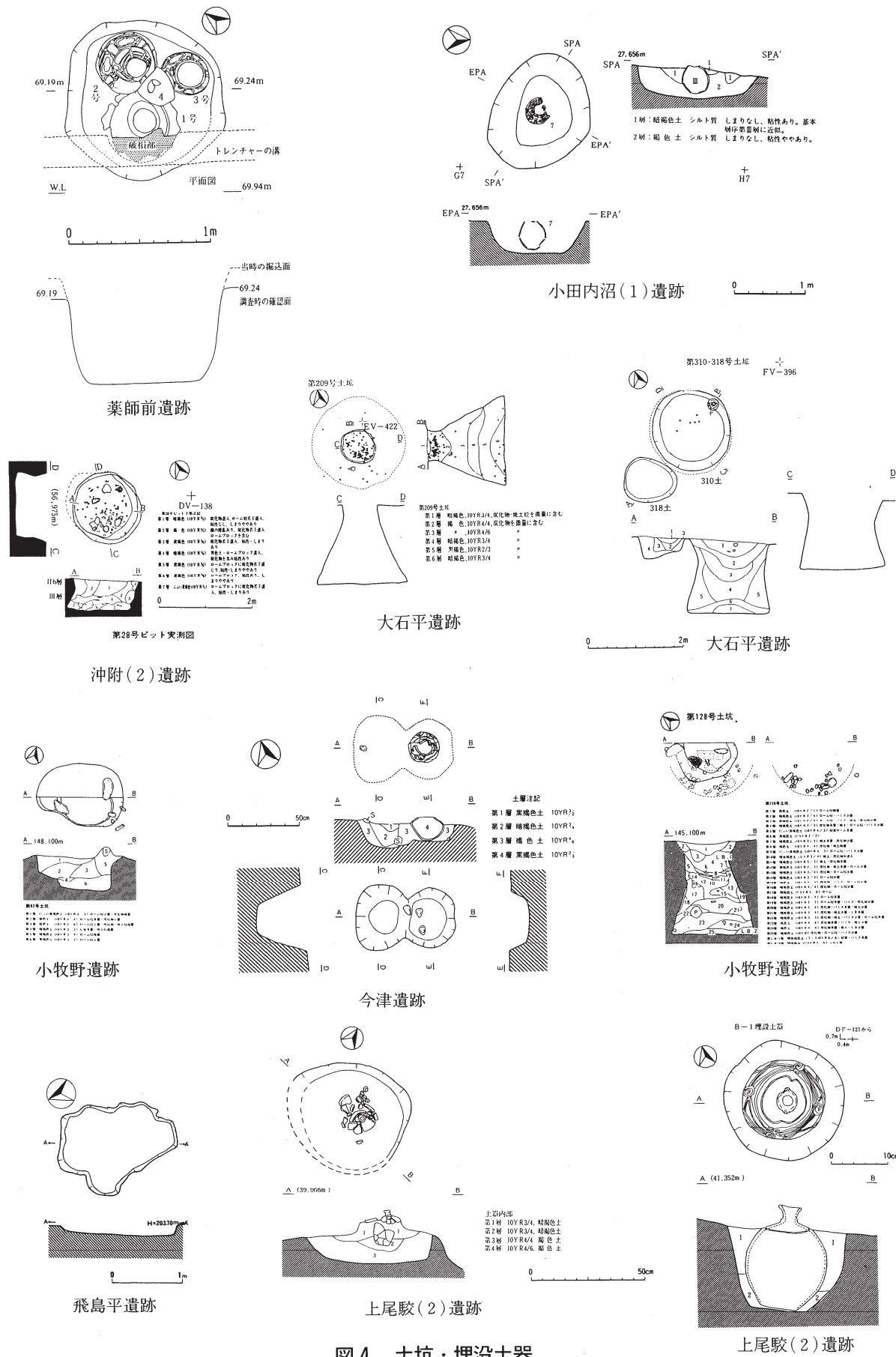


図4 土坑・埋没土器

－遺構外－

《出土遺跡》

遺構外とは、遺構に伴わない遺物包含層と呼称されているものを遺構外に分類している。

遺構外から出土した遺跡は、北海道2遺跡・秋田県4遺跡・岩手県9遺跡・青森県25遺跡と40遺跡と遺構外からの出土が多い。

また、遺跡内においては、遺構外のみの出土遺跡と、遺構（土坑及び住居跡）と遺構外が組合わさせて出土がみられる遺跡もあるが、遺構外のみの遺跡が多く占める。

《出土状態》

報告書中で、出土状態を記載しているものは、外長根(4)遺跡(青森県1981)で、直立状態で出土し、部分的に飛び散った状態で出土しており、長者森遺跡(青森県1983)でも直立状態で出土し、蓋部が1m離れた地点から出土している。

遺跡内では、大石平遺跡(青森県1987)で切断蓋付土器が南側地区に集中して出土しており、使用場所の限定も考えられる。また、高屋館遺跡(秋田県1990)・大湯環状列石(鹿角市1986・1993・1995・1998)のように環状列石の遺構と関連が強い出土もみられる。

なお、遺構との関連では弥次郎窪遺跡(青森県1990)の『…北側の南面斜面上から出土した第Ⅲ群土器も同様であるが、土壙等の遺構が集中している範囲と出土地点が一致する…』として、土坑との関連が強いと指摘している。

しかし、切断蓋付土器の出土状態を記載している報告書が少なく、遺構外からの出土状態を十分に検証できないのは残念である。

2 切断蓋付土器の器形（図5）

A 《切断蓋付土器のプロポーション》

土器のプロポーションは、口頸部が内反し、内反度の強いものと、強くないものがある。胴部は中央部及び下半部が張りだした壺形の器種である。

口縁部と底部の計測を対比図の図5をみると、口縁部の計測を1とすると、底部の計測が2という1:2の比率のものが主体を占める。なお、尻高遺跡図5-2は、口縁部と底部が1:1という比率であり、他の土器とは形態に差がみられるものである。

胴部の文様帶は、図5-3からみると切断面のラインと、器形が最大に張りだすライン及び底部のラインとで対比すると、すべて1:1の対比で文様区画帯を構成しており、多くの切断土器も同様である。なお、図5-4は、1:2の対比で区画帯を広義に構成しているものであるが類例は少ない。このようにプロポーションを計測及び比率の対比という観点からみると、切断蓋付土器の器形のプロポーションは、底部及び口縁の対比との関係を意識した製作であり、かつ文様区画帯にも一定の規制がみられるものである。

B 切断蓋付土器と他の器種との関連

《上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡》

青森県六ヶ所村に所在する上尾駒(2)遺跡(青森県1988)と大石平遺跡(青森県1985・1986・1987)の二遺跡は、尾駒沼と老部川に挟まれた標高約50mの河岸段丘上で、尾駒沼寄りに上尾駒(2)遺跡、老部川寄りに大石平遺跡が位置している。

両遺跡は、むつ小川原開発に伴う工事で青森県教育委員会が、昭和58年～61年にかけて、ほぼ全面を調査した遺跡である。

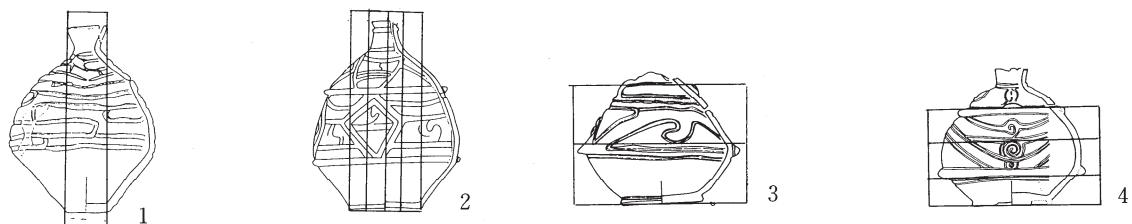


図5 計測対比図

調査の結果、縄文時代後期の集落である点、時期が十腰内I式を主体としている点、大規模な集落である点など多くの共通点をもつ遺跡である。また、集落の距離が800mしか離れておらず、当時からこの集落が同一時期に形成されていたのか、時間差をゆうする集落であったかなど議論があった。しかし、いまだ二遺跡について比較及び検討を加えた論考は表れていない。

今回、切断蓋付土器が両遺跡から出土しており、同一時期の面から切断蓋付土器をも含めた他の器種にも検討を加え、切断蓋付土器の用途にふれてみたいと思う。

なお、集落の構造及び他の遺物も総括しての検討が必要であるが、形態及び器種に限定して検討を加えたい。

《器種の問題》(図6・7)

上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡の出土土器の器種は、深鉢・鉢・台付鉢・片口・壺形の5器種に分かれる。

磯崎氏は十腰内I式の器形について『…津軽方面の十腰内I式は壺・鉢・浅鉢などが多く、皿、注口などは極めて少ない…』(磯崎1964)と指摘しているが、この器種の傾向は十腰内文化圏の器種にあてはまる。

土器に関しては、口頸部が内反するA種と、外反するB種及び底辺部がえぐれるC種とに分け、更に種の中で細分する。

A種1…口頸部が内反し、胴部上半がはるもの (図6)

A種2…口頸部が内反し、肩部がはるもの (図6)

B種1…口頸部にむかって外反するもの (図6)

B種2…口唇部寄りが内反するもの (図6)

C種…底辺部がえぐれ、あげ底を呈するもの (図6)

深鉢形は、器種の中で最も多く出土するもので、A種の形態を多く占める。

鉢形は、形状において深鉢形の形態と同様のA種・B種の他に、C種が存在し器種の中でも多くのバリエーションをゆうする。

台付鉢形は、A種2及びB種2の形状がみられず、形態が片寄る器形である。

片口は、器高の差があるものの、A種1のタイプである。

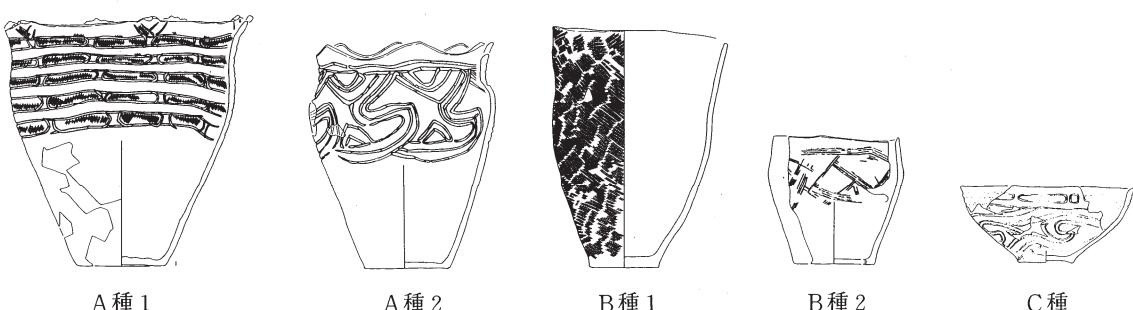




図7 切断蓋付土器と壺形土器の対比図

壺形は、基本的な形態としてはA種1である。A種1の中で張りだす部位の部分が胴部上半・胴部中央部・胴部下半部とに分かれる。また、橋状把手をゆうする土器もみられる。

以上のように器種と形態を上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡とで比較・検討(図7)すると、深鉢形ではA種1を多く製作し、主体的な形態である点は両遺跡ともに変化はみられない。

鉢形は多くのバリエーションをもつ点も類似している面を有し、深鉢形と鉢形と片口についても形態に変化はみられない。

壺形では、上尾駒(2)遺跡で長頸壺及び形状の胴部上半が張るプロポーションをもつ土器が多く、橋状把手を有する壺形が少ないという特徴があるのに対して、大石平遺跡では胴部上半部がはる形態が少なく、橋状把手をゆうする壺形が多いという特徴があり、形状面で相異する面が指摘できる。

切断蓋付土器は、胴部下半部が張りだし口頸部の内反度が強く、口縁部が狭い点及び突起の吊り手を有する点など、切断蓋付土器以外の壺形土器と形態を異にしている。

また、大石平遺跡では大形で胴部下半部が張りだす形態のものが多いなど、切断蓋付土器においても二遺跡に形態の差がみられる。

なお、大石平遺跡では鉢形C種と台付鉢形の出土が多いのに対して、上尾駒(2)遺跡では壺形土器に多くのバリエーションがみられる点と台付鉢形が少ない点があげられる。

この二遺跡は、器種の中の形状のバリエーション及び器種の製作や、遺跡における使用という面で相異している。この事は、切断蓋付土器の製作でもプロポーション・器高の面で差異がみられる。つまり、器種及び切断蓋付土器からみれば、別個の集団ではないかと考えられる。

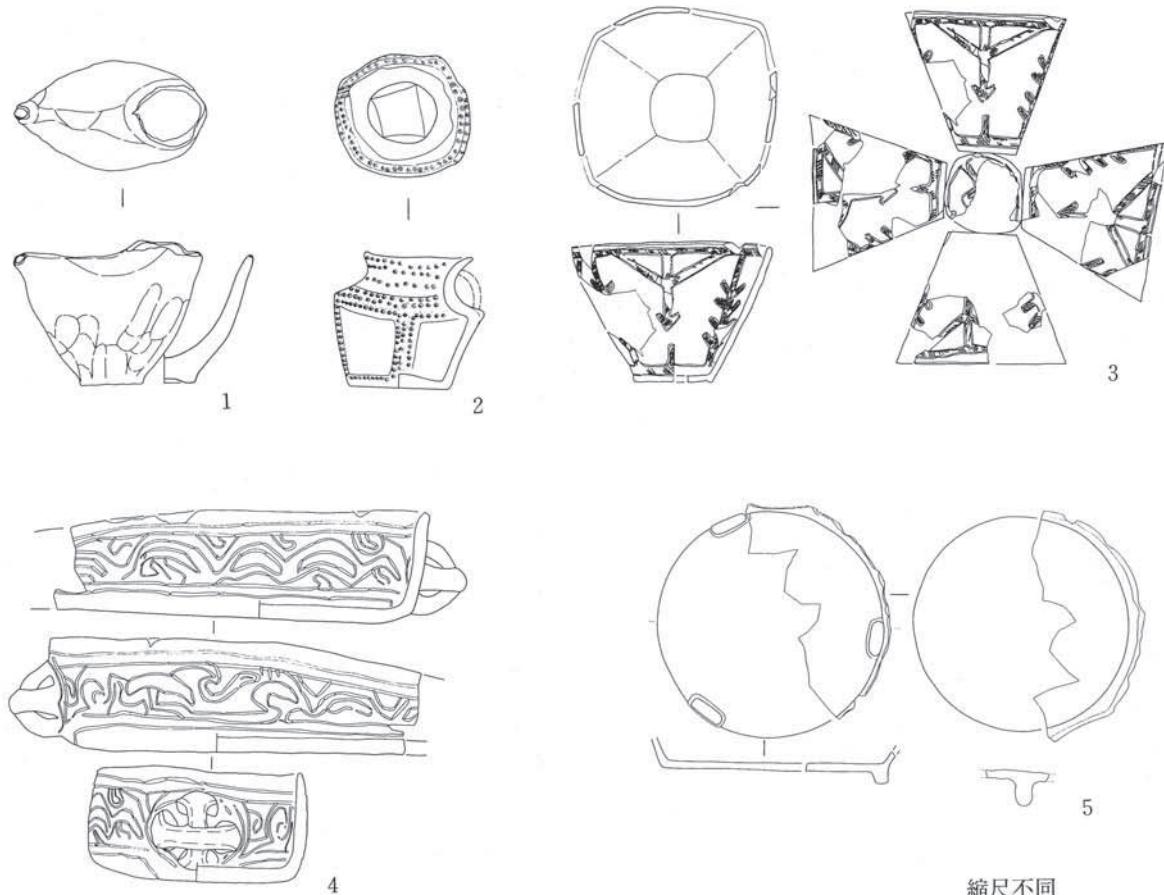


図8 異形土器集成

縮尺不同

《異形土器の発生》(図8)

切断蓋付土器以外の異形土器を概観する。

今回は、異形土器の範疇に片口及び注口土器は含んでいないが、本地域の器種の中では極端に出土例が少ない。また、動物を底面に貼り付けている動物内蔵土器及び狩猟文土器も、今回の異形土器に含んでおらず、日常容器とは異なるプロポーションを呈する土器を異形土器として把握した。(注3)

図8-1は、報告書中では双口異形土器と呼称されているものである。無文で二つの開口部を両端に有し、胴部がふくらむ現代の「鳩笛」に似た形態である。

図8-2・3は、形状が方形を呈する土器である。

2は口頸部が内反し平口縁で把手を有する形状であり、3は底辺部から口唇部にかけて外反する形態である。文様は、2が全面に刺突文・3が四面に弓矢状の文様と樹木を組み合わせた文様を施文している。

図8-4は、片側に十字形の把手が付く把手付鉢であり、全体の形状は現代の「おまる」にちかい形を呈している。文様は、沈線の橢円形文様を片面では規則性をもつモチーフに対して、片面は不規則なモチーフで施文されている。

図8-5は、脚部をもつ土器である。全体の形態は不明であるが、残存部から推定すると脚部をもつ皿形土器と思われる。

これらの異形土器の時期は、1が縄文時代中期の最花式・3が縄文時代後期の前十腰内I式、2・4・5が縄文時代後期の十腰内I式に比定される。

土器に施文される文様をみると、2は十腰内I式では部分的にしか使用していない円形刺突を全面に施文している点や、1は四面に狩猟文のモチーフで構成されている点、4は片面の施文が十腰内式の文様パターンの基本である主体文様と副次文様の組み合わせがみられるの対して、片面は不規則なモチーフで相反する文様構成となっている。

このようにみてくると、異形土器の発生は、当初から日常容器とは別個なものとして考えられて器を製作し、文様も日常容器とは相反する文様を描くという社会的背景が存在していたと考えられる。なお、形状からみると1・2・4の把手及び注口を有するプロポーションの土器は、容器に物を蓄え注ぐ(注4)という用途が考えられ、3・5は注ぐという行為より物を蓄えるという行為が優先される用途が考えられる。形態の面から判断すると、二つの用途が考えられると思われる。

C 《切断蓋付土器の時期別変遷》

出土した切断蓋付土器の時期別の変遷をみると、切断蓋付土器の製作は三内遺跡の縄文時代中期後葉の最花式から縄文時代後期中葉の十腰内I式にかけての時期に製作される。

時期毎に概観するが記載するにあたって、縄文時代中期を最花式・大木10式併行期に、縄文時代後期は前十腰内I式期と、十腰内I式とに大別して記載する。

なお、切断蓋付土器の時期を決定するにあたっては、発掘調査時の共伴遺物を基本に区別したが、一部の土器は文様施文で判断している。

一縄文時代中期一

《最花式》図9-1

最花式に該当するのは、三内遺跡(青森県1978)であり、出土した切断蓋付土器の中では初現期の土器である。

形態は、口縁部を一部欠損しているが、胴部下半に膨らみをもつものであり、器外面に横位調整がみられる無文の土器である。

当初、この土器は縄文時代後期に分類されていた土器であった。この原因は無文土器＝後期という考え方であった為であり、出土したJ-14号住居跡の共伴遺物を再検討すると最花式に併行すると考えられたからである。

《大木10式併行期》図9-2・3

三内稻荷林遺跡(成田1986)注(5)・戸井貝塚(戸井町1993)が概当すると思われる。

形態は、図9-2が胴部下半が張りだすもので、前段階の形態と類似したものと、胴部の中央部が張りだし口頸部が長い形態の二種の形態がみられる。

文様は、磨消縄文を用いて胴部下半に波頭状文を巡らして区画帯を構成し、区画帯の内部にJ字状及び梢円形文様を施文している。

一縄文時代後期一

《前十腰内I式期》図9-4~19

縄文時代後期初頭期～前葉期に至る期間を、前十腰内I式期として一括してまとめて把握する。

長者森遺跡(青森県1983)・螢沢遺跡(青森市1979)・今津遺跡(青森県1986)・弥栄平(6)遺跡(青森県1991)・沢掘込遺跡(青森県1992)・沖付(2)遺跡(青森県1986)・薬師前遺跡(倉石村1998)・牛ヶ沢(4)遺跡(青森県1997)・北の林II遺跡(秋田県1982)・馬立II遺跡(岩手県1988)・青ノ久保遺跡(岩手県1987)から出土した切断蓋付土器が、出土状態及び共半遺物から当該期に該当すると思われる。

形態は、胴部下半が張りだすグループ、胴部中央部及び上半部が張りだすグループ、口頸部から胴部にかけてずん胴のグループ、橋状把手をもつグループの四形態に分類でき、胴部下半が張りだすグループのものが多い。

文様は、文様要素として沈線及び磨消縄文を用いて施文している。

文様構成は、図9-14が器外面の全面に文様を施文しているが、多くは胴部の張りだし部に横位の沈線を巡らして区画帯を構成している。

区画帯の内部には、コの字状文及び横位方向に展開する稚拙な入組文を施文している。

《十腰内I式期》図10-20~36

十腰内I式は、編年状a・b式に二分できるが、今回は二分せず十腰内I式と一括した。

当概期に相当する遺跡は、中の平遺跡(青森県1975)・上尾駒(2)遺跡(青森県1988)・大石平遺跡(青森県1987)・弥次郎窪遺跡(青森県1990)・小田内沼(1)遺跡(三沢市1992)・小牧野遺跡(青森市1996)・大湯環状列石(鹿角市1993・1998)が概当すると思われる。

また、十腰内I式に至っては、切断蓋付土器が出土する遺跡と出土しない遺跡とに分かれる。

形態は、胴部下半が張りだすグループ、胴部上半及び中央部が張りだすグループ、ずん胴形のグループ、橋状把手をもつグループの四形態であり、前段階と比較すると胴部上半及び中央部が張りだすグループの形態が多いのが特徴である。

文様は、図10-21が器外面の全面に施文しているが、他は横位沈線及び粘土紐を巡らして区画帯を構成している。

区画帯の内部には、横位方向に展開する稚拙な入組文図10-26、及び縦位方向に展開する渦巻文様と図10-24と、横位沈線間にS字状文図10-31を施文している。

3 おわりに

今回、切断蓋付土器を出土状態と器形という観点から分析をこころみた。

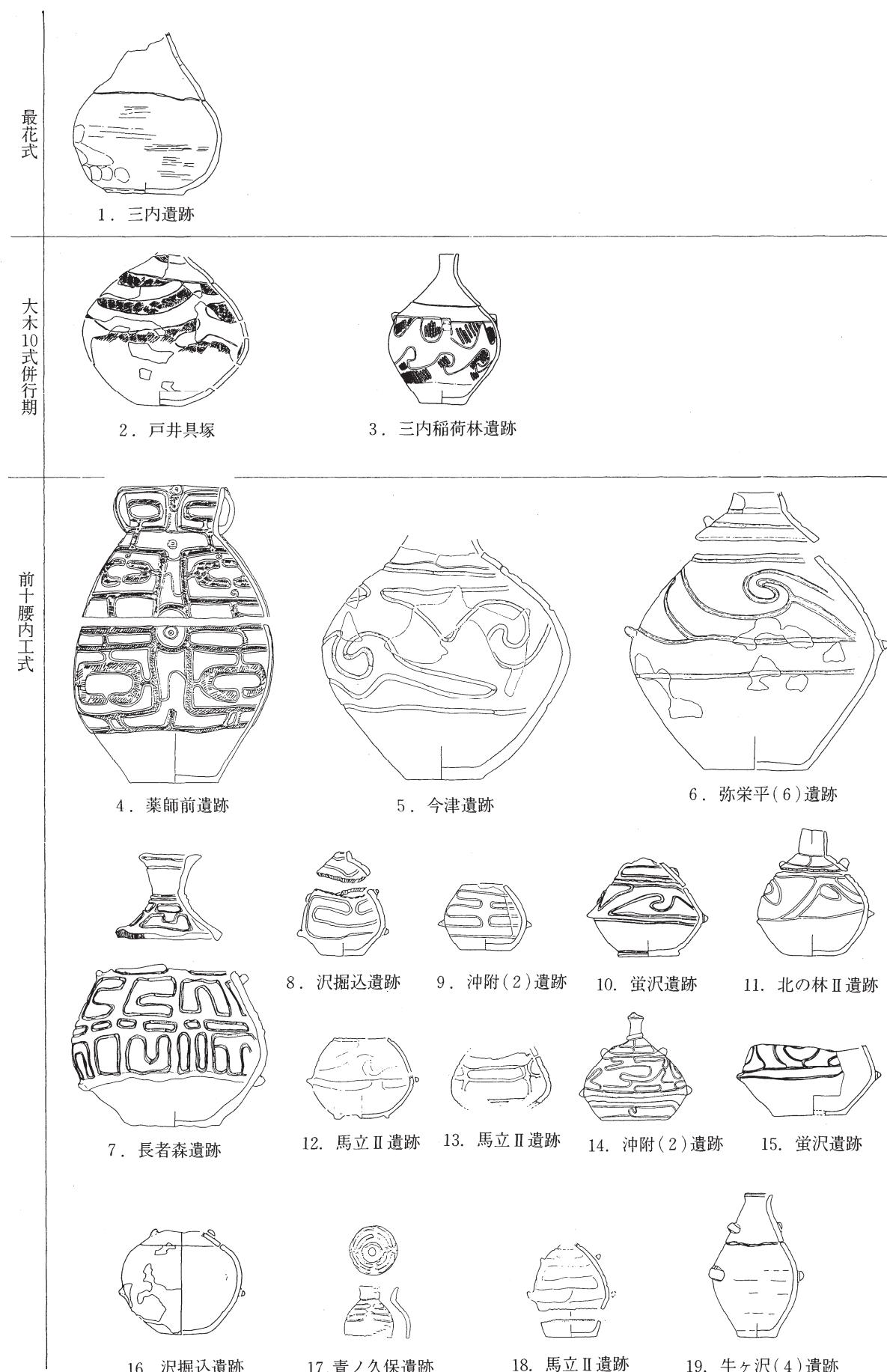


図9 切断蓋付土器変遷図 (1)

十腰内工式

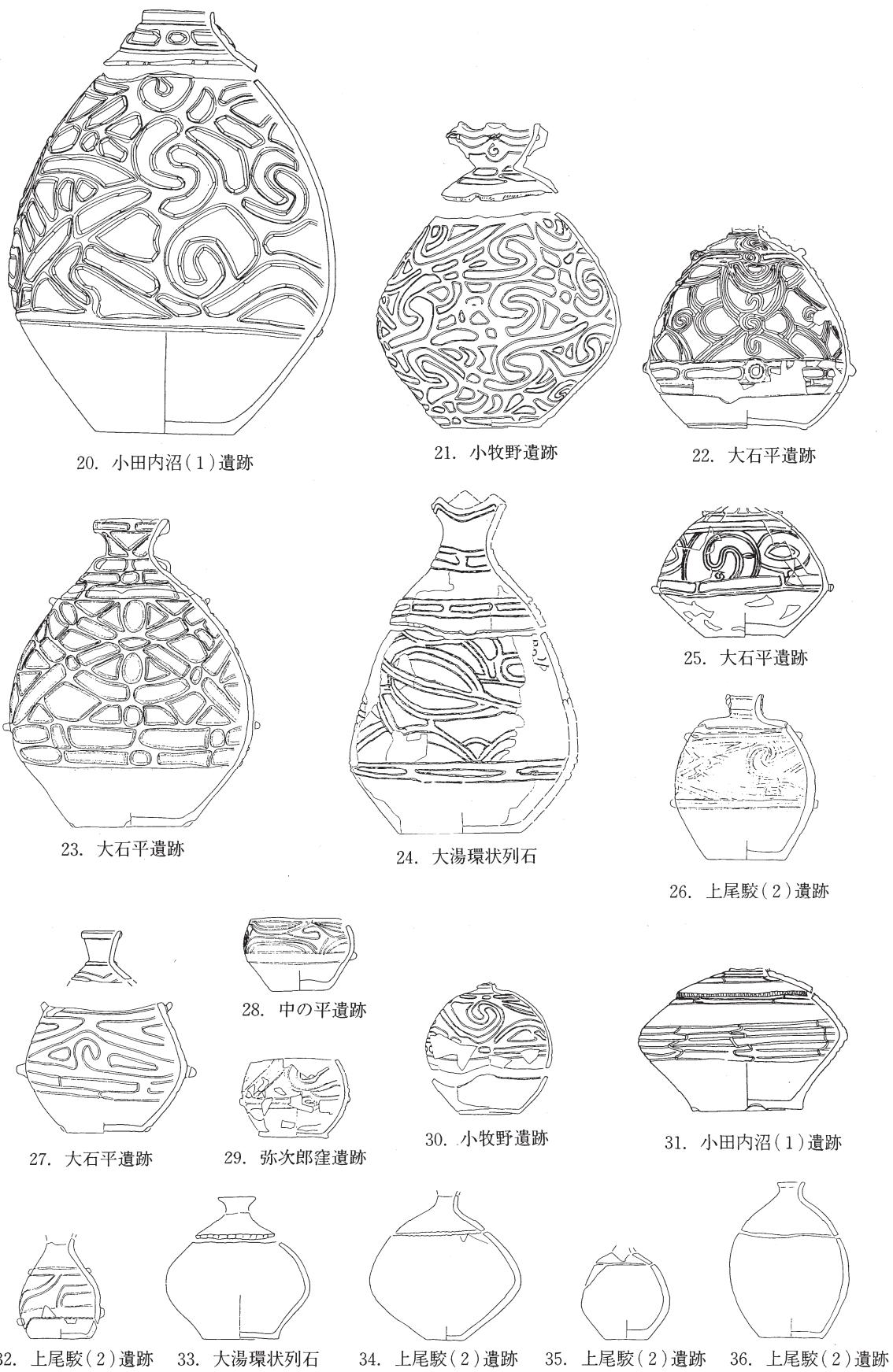


図10 切断蓋付土器変遷図 (2)

出土状態においては、住居跡内で床面に倒立した状態で設置している例や、住居跡内の覆土の面で火を焚いた痕跡などから考えて、住居跡を利用した切断蓋付土器を伴う祭式が考えられる。なお、住居跡の利用は関東地方で出土する異形台付土器が、住居廃絶の儀式(内田1985)で使用したと指摘している

また、薬師前遺跡の人骨の出土、小田内沼(1)遺跡の土壌の分析、土坑底面の出土などから、切断蓋付土器が埋葬時の容器及び埋葬関連の容器(副葬品・供献品)として使用したこと事が考えられる。器形面では、十腰内Ⅰ式期の上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡の出土土器の分析から、他の器種と異質である点、日常の壺形と相異する形態をゆうする点など、製作の当初から、他の日常容器とは別個の容器を製作したと考えられる。

前記の『器種の問題』で壺形の中で形が相異する点を指摘した。形と機能については、佐原氏が『…土器の形は土器の機能だけで決定されるわけがない、機能のうえで不必要的要素が加わることもある…縄文人にとっては、それを加える呪術的な必要性があったのである…』(佐原1979)とした。つまり、切断蓋付土器が何故に土器を切り離さなければならないのかという行為は、佐原氏が指摘した不必要的要素であり、特に胴部下半を切断している例などは、不必要的要素そのものではないだろうか。

このような特殊の容器を産み出した背景には、当時期が埋葬の面で甕棺葬や環状列石の形成、遺物の面では器種の分化、第二の道具の多量の製作など遺構の面で多くの変革を迎える時期である。それ以前の縄文時代中期末葉(大木10式併行期)～縄文時代後期初頭(牛ヶ沢式)では、小規模な集落であり、遺構・遺物面では変革はみられない。十腰内Ⅰ式期に至って大規模な集落を形成する段階であり、種々の遺構及び遺物の面で変革がみられる。

また、谷口氏が縄文時代後期の時代背景として『…呪術的な儀式に際して、特別な器が用意され使われたことは十分に考えられる…』(谷口1988)とした。呪術社会の段階で生じた器の発生が考えられ、十腰内文化圏の中の呪術社会という社会背景の一つとして存在し、出現したとも考えられる。

注

- 注(1) 浜町遺跡(戸井町1990)と駒板遺跡(岩手県1986)の2遺跡は、住居跡の覆土から、遺物が各時期にわたって混在して出土しており、後世の搅乱を受けた事も考えられるので、今回の分析からは除外している。
- 注(2) 炉内でありながら二次火熱を受けていない、この事は住居跡廃棄後の置かれたものであり、祭祀行為が伺えるものである。
- 注(4) 国立歴史民俗博物館にて、小三内遺跡出土の縄文時代中期の三脚土器を実見した。報告書以外の遺物を調査すれば、事例は増加すると思われる。
- 注(5) 青森県鰺ヶ沢町餅ノ沢遺跡の平成10年の発掘調査では、縄文時代中期末葉の大木10式併行期の注口をもつ異形土器が出土し、赤色顔料がつまた状態で出土しており、水溶性の液体より粉末状のものを保管していた事が考えられ、すべてこの種の容器が注ぐ為の容器かどうかは検討が必要である。
- 注(6) 本遺跡は遺跡台帳に記載されていないものであり、現在の三内丸山遺跡の範疇として判断していくのではないだろうか。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会(1975)『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
- 青森県教育委員会(1977)『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 青森県教育委員会(1978)『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 青森県教育委員会(1981)『国営八戸平原開拓建設事業に係わる埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』－外長根(4)遺跡－青森県埋蔵文化財調査報告書第64集
- 青森県教育委員会(1983)『長者森遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第74集
- 青森県教育委員会(1985)『尻高(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
- 青森県教育委員会(1986)『今津遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第95集
- 青森県教育委員会(1986)『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会(1988)『上尾駒(2)遺跡Ⅱ発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
- 青森県教育委員会(1987)『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 青森県教育委員会(1990)『弥次郎雀遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第128集
- 青森県教育委員会(1991)『弥栄平(6)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第138集
- 青森県教育委員会(1992)『沢掘込遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
- 青森市教育委員会(1996)『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 秋田県教育委員会(1982)『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』－飛鳥平遺跡－秋田県文化財調査報告書第89集
- 秋田県教育委員会(1982)『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』－北の林Ⅱ遺跡－秋田県文化財調査報告書第90集
- 秋田県教育委員会(1990)『高屋館遺跡』秋田県文化財調査報告書第198集
- 磯崎正彦(1964)『日本原始美術1 繩文土器』－繩文式土器各論Ⅳ後期の土器－
- 岩手県文化振興事業団(1986)『駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集
- 岩手県文化振興事業団(1987)『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第118集
- 岩手県文化振興事業団(1988)『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集
- 岩手県文化振興事業団(1988)『馬立Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集
- 内田儀久(1985)『異形土器台付土器用途考(上)－使用目的の考察－』なわ第23号
- 岡本孝之(1983)『第5巻 繩文土器Ⅲ』「用途・機能論」雄山閣出版
- 鹿角市教育委員会(1986)『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』鹿角市文化財調査資料31
- 鹿角市教育委員会(1993)『大湯環状列石発掘調査報告書(9)』鹿角市文化財調査資料45
- 鹿角市教育委員会(1995)『大湯環状列石発掘調査報告書(11)』鹿角市文化財調査資料52
- 鹿角市教育委員会(1998)『大湯環状列石発掘調査報告書(14)』鹿角市文化財調査資料61
- 倉石村教育委員会(1997)『薬師前遺跡』倉石村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 佐原真(1979)『土器の用途と製作』有斐閣
- 谷口康浩(1988)『繩文人の道具－繩文土器の様式と変遷』講談社
- 戸井町教育委員会(1990)『浜町A遺跡Ⅰ』
- 戸井町教育委員会(1993)『戸井貝塚Ⅲ』
- 成田滋彦(1986)『切断蓋付土器考』弘前大学考古学研究第3号 弘前大学考古学研究会
- 八戸市教育委員会(1997)『牛ヶ沢(4)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第71集
- 三沢市教育委員会(1992)『小田内沼(1)遺跡発掘調査報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 北海道埋蔵文化財センター(1987)『上磯町矢不来2遺跡』北海道埋蔵文化財調査センター報第37集